

# 話し言葉における「ではないか」と「のではないか」の使用傾向

野田 春美

NODA Harumi

神戸学院大学人文学部

**要旨** 本稿では2つの会話コーパスを使って、まず、話し言葉における、否定辞を含む表現の使用実態を明らかにした。使用の多いことが確認された「ではないか」「のではないか」についてさらに調査、考察をおこなった。

「ではないか」に倒置・付加が多く見られること、「のではないか」では自思考引用が比較的多く、繰り返されることもあること、「のではないか」は、「か」以外の終助詞などを伴う例が40%以上見られることはいずれも、やわらげようとする意識と関係していると考えられる。聞き手の認識を喚起したり要請したりする「ではないか」も、話し手の見込みを表す「のではないか」も間接的な表現であるという面をもつ一方で、「否定」「疑問」という聞き手に対して強い印象を与える可能性もはらむ表現である。話し手は、その間接性を活用しながらも、表現が強くなり過ぎないようにやわらげるための手段をとる傾向がある。

**キーワード** 否定、「ではないか」、「のではないか」、話し言葉、コーパス

---

## 1. はじめに

日本語には、「食べない」「飲みません」のような基本的な否定文だけでなく、「働かなければならない」「間違っているのではないだろうか」のように否定を含む表現が多くある。本稿では、まず、現代日本語の話し言葉における、否定辞を含むさまざまな表現の使用状況を、2種の会話コーパスを用いた調査に基づいて示す。

次に、その中でも否定疑問の形で独自の性質をもつ「ではないか」（話し言葉では「じゃない（か）」）、「のではないか」（話し言葉では「んじゃない（か）」）を取り上げ、話し言葉における使用傾向を明らかにする。

## 2. 使用する会話コーパスの概要

本調査では2種の会話コーパスを利用する。いずれも、国立国語研究所のデータベースとして公開されているものである。

1つは「現日研・職場談話コーパス」である。現代日本語研究会（編）『女性のことば・職場

編』『男性のこぼ・職場編』（ひつじ書房，合本 2011）が元となっている。女性 19 名，男性 21 名の職場での朝，会議・打ち合わせ，休憩時の談話が対象である。女性の談話は 1993 年録音，男性の談話は 1999 年から 2000 年にかけての録音である。

もう 1 つは「名大会話コーパス」である。大曾美恵子代表による，合計約 100 時間の日本語母語話者（161 名）同士の雑談を文字化したものである。10 代から 90 代の幅広い世代を含むが，女性のほうが多い。中部地方の話者が多く，方言も含まれている。親しい間柄の雑談が多いが，初対面や先輩・後輩の会話も含まれている。2001 年から 2002 年にかけて録音されている。

上記の 2 つのコーパスについては音声データは公開されていない。これらとは別に「日本語日常会話コーパス」のモニター版でも調査をおこなっているが，2022 年の本公開後，映像・音声データを入手して改めて調査結果を確認する予定である。したがって本稿は，まず 2 コーパスの文字データのみで，否定辞を含む表現の使用傾向を探る試みとなる。

### 3. 話し言葉における否定を含む表現の使用傾向

#### 3-1 調査対象とする表現とその分類

本稿では，狭義の否定表現だけでなく，否定辞「ない」「ぬ（ん）」「ず」を含む表現を広く調査対象とする。モダリティ形式として固定化しているものも含む。以下，本稿における分類を示す。話し言葉における実例を整理するために設定した分類である。

##### 《基本的な否定》

「雨，降らないね」「わかりません」「難しくない」「無料ではない」のような，いわゆる否定文である。なお，「時間がない」のように非存在を表す「ない」は形容詞だが，この分類に含む。次の（1）で示すように，副詞との共起などにおいて，否定文と同じふるまいをするためである。

- （1） a. あまり {＊高い／高くない}。  
b. あまり {＊ある／ない}。

##### 《評価のモダリティ》

モダリティ表現のうち，評価のモダリティには否定辞を含む形式が多くある。高梨（2010）による〈必要〉〈不必要〉〈非許容〉〈許容〉の分類にしたがうと，それぞれに次のような形式がある。

- （2） 〈必要〉 「しなきゃならない」「しないと（いけない）」「しなくちゃ」など  
〈不必要〉 「しなくてもいい」「しなくても大丈夫」など  
〈非許容〉 「してはいけない」「しちゃいかん」など  
〈許容〉 「してもかまわない」  
〈後悔〉 「しなきゃよかった」「しなくてもよかった」など

〈許容〉は基本的な形である「してもいい」には否定辞は含まれないが，「してもかまわない」の場合には否定辞が現れる。評価のモダリティ形式の周辺的な用法として，〈後悔〉は別に分類する。

なお，〈必要〉では「しなきゃならない」のように否定辞が 2 つ現れることがあるが，合わせて 1 つとして集計する。

##### 《「いけない」類》

評価のモダリティの〈非許容〉に準じるものとして，「いけない」「あかん」などをここに分類

する。次のような例である。

(3) いや、それはいかん。

《「ではないか」類》《「のではないか」類》

否定疑問の形で独自の性質をもつ「ではないか」「のではないか」をそれぞれ分類する。「ではないか」は、話し言葉では「じゃない(か)」「じゃん」などの形をとり、(4)のように、その事態を聞き手に認識させようとするときなどに使われる。

(4) ほら、ここにあるじゃない。

「のではないか」は、話し言葉では基本的に「んじゃない(か)」などの形をとり、(5)のように、話し手の判断を断言せず示すときに使われる。

(5) ちょっと待ったほうがいいんじゃないかな。

「ではないか」「のではないか」については、4. で詳しく述べる。

《「かもしれない」など》

評価のモダリティおよび「ではないか」「のではないか」以外のモダリティ形式で、否定辞を含んで固定化しているものをここに分類する。「かもしれない」と「にちがいない」である。実例としてはほとんどが「かもしれない」なので、《「かもしれない」など》とする。

(6) うまくいくかもしれないね。

(7) うまくいくにちがいないよ。

《否定依頼》

行為要求のうち、行為の非実現を要求するものをここに分類する。なお、禁止を表す「な」は調査対象としない。

(8) 遅れないでくださいね。

《依頼・勧誘》

行為の実現を要求する表現で否定辞を含むものをここに分類する。否定を使うことによって聞き手の意志に配慮する表現となる。

(9) 明日、来てくれないかな。(依頼)

(10) 一緒に行きませんか。(勧誘)

《「のだ」否定》

「のだ」の文の否定をここに分類する。

(11) いや、私が言ったんじゃないですよ。

《「わけだ」など否定》

「のだ」以外のモダリティ形式の否定をここに分類する。「わけではない」「わけがない」など「わけだ」の否定がほとんどなので、《「わけだ」など否定》とする。

(12) 嫌なわけじゃないけど。

(13) 来そうにないね。

《二重否定》

否定が2つ含まれているが、1つとして集計する。なお、「なければならない」のような形は評価のモダリティとして集計し、この分類には含まない。

(14) できなくはない。

《語内・慣用》

否定辞が含まれている語や、慣用的な否定表現をここに分類する。

- (15) 「すみません」「しょうがない」「もったいない」「にもかかわらず」  
「どうしようもない」「間もない」など

### 3-2 否定を含む表現の使用傾向概観

2つのコーパスを対象とし、検索アプリケーション「中納言」による検索によって、3-1で挙げた表現を抽出、整理した<sup>1)</sup>。分類結果は表1のとおりである<sup>2)</sup>。

否定辞を含むさまざまな表現が出現しているが、2つのコーパスにおいて否定を含む表現の使用傾向が類似していることがわかる。1%を超える7種類の順序はほとんど同じである。

《基本的な否定》が約67%、次に《「ではないか」類》《「のではないか」類》が続く、合わせて十数%、その後に、《語内・慣用》や《評価（必要）》、《「かもしれない」など》《「わけだ」など否定》が続く。

会話の場面や地域などが異なる2つのコーパスで類似した傾向が出ていることから、話し言葉における否定辞を含む表現の使用状況は表1に示すような割合なのだと考えられる<sup>3)</sup>。

《基本の否定》以外では、《「ではないか」類》《「のではないか」類》が多いことが注目される。それ以外では、《評価（必要）》や《「かもしれない」など》が目立つ。なお、否定疑問文については、《基本の否定》が疑問になった「寒くない？」のようなものもあれば、否定辞を含む評価のモダリティ形式が疑問になった「どうしても行かなきゃいけない？」のようなものもあり、上記の分類とは異なる軸での集計が必要なため、表1には示していない。

表1 2コーパスにおける否定を含む表現の出現状況

職場談話			名大会話		
分類	件数	割合	分類	件数	割合
基本	2630	67.4%	基本	18647	67.4%
「ではないか」類	333	8.5%	「ではないか」類	3456	12.5%
「のではないか」類	273	7.0%	「のではないか」類	1567	5.7%
語内・慣用	212	5.4%	評価（必要）	1069	3.9%
評価（必要）	196	5.0%	語内・慣用	970	3.5%
「かもしれない」など	108	2.8%	「かもしれない」など	843	3.0%
「わけだ」など否定	49	1.3%	「わけだ」など否定	305	1.1%
「のだ」否定	23	0.6%	評価（不必要）	200	0.7%
評価（非許容）	20	0.5%	評価（非許容）	142	0.5%
「いけない」類	18	0.5%	「いけない」類	133	0.5%
評価（不必要）	18	0.5%	「のだ」否定	100	0.4%
否定依頼・禁止	10	0.3%	二重否定	93	0.3%
評価（許容）	7	0.2%	否定依頼・禁止	81	0.3%
依頼・勧誘	4	0.1%	依頼・勧誘	34	0.1%
評価（後悔）	2	0.1%	評価（許容）	11	0.0%
二重否定	1	0.0%	評価（後悔）	11	0.0%
計	3904		計	27662	

出現が比較的多いことが確認された「ではないか」類と「のではないか」類の調査結果について、5. で改めて考察する。以下、「ではないか」「のではないか」と呼ぶ。考察の前に、4. で両者に関する先行研究を見る。

#### 4. 「ではないか」と「のではないか」に関する先行研究

##### 4-1 否定疑問文と「ではないか」「のではないか」

否定疑問文では、事態成立への話し手の「傾き」が表されることが、安達（1999）などで指摘されている。たとえば、次の（16）は、「対話の現場で観察される相手の様子やそれまでの状況などから、相手が疲れているという見込みを話し手が持っている場合に使われる」（p.47）という。

（16）君、疲れていませんか？ （安達（1999），p.47）

宮崎（2002）は、一般的な否定疑問文と「ではないか」「のではないか」の関係について、次のように述べている。

否定疑問形式、「のではないか」「ではないか」の関係は、否定疑問形式に未分化に内在する有標性のうち、話し手の見込みを伝えるという、認識レベルの有標性を「のではないか」が受け継ぎ、当該文脈にそれと対立するような認識を持ち込むという、文脈レベルの有標性を「ではないか」が受け継ぐ形で、確認要求形式としての機能を特化させている、というように考えることができる。（p.207）

「確認要求」の定義や範囲については本稿は宮崎（2002）と立場が異なるため、ここでは深入りしない。一般的な否定疑問文と「ではないか」「のではないか」の関係については宮崎（2002）の指摘は妥当であると考えられる。以下、例と共に見ておく。まず、一般的な否定疑問文との関係が比較的わかりやすい「のではないか」について、宮崎（2002）で挙げられた例を見る。

（17）枝にまたがっていたグルカ兵は足をぶらぶら揺りながら、大声できました。

「おい、日本兵を〔見なかったか／見タンジャナイカ〕？」

水島は手をあげて、はるか遠くの山の麓を指しました。

（竹山道雄『ビルマの豎琴』，平仮名が原文，宮崎（2002）p.205）

（17）では、一般的な否定疑問文でも「のではないか」でも、話し手は「（聞き手が）日本兵を見た」と見込んでいるという共通点がある。ただし、宮崎（2005）では、「のではないか」のほうが「文脈から独立して話し手の認識を表すことができる形式として、一般的な否定疑問文よりも文法化が進んでいる」（p.31）ことも指摘されている。

「ではないか」については、宮崎（2002）は次のような例を挙げ、「話し手の認識を聞き手に押しつけて確認させるもの」（p.207）であるとする。（18）では、「聞き手の傘はそこにある」という話し手の認識が示されている。

（18）〔傘を探している人に〕君の傘は、そこにあるじゃないか。 （宮崎（2002）p.207）

そして、「ではないか」の性質は、次のような一般的な否定疑問文において、話し手の認識が、文脈と対立する「確か、相手は傘を持っていたはずだ」という方向に傾いていることと共通しているということが指摘されている。

(19) 髪が濡れてるけど、キミ、傘持ってなかったか？ (宮崎 (2002) p.206)

以上、宮崎 (2002) に沿って、一般的な否定疑問文と「ではないか」「のではないか」の関係を確認した。「のではないか」は話し手の見込みを述べる形式であるのに対し、「ではないか」は聞き手に認識させようとする性質をもつ点が重要である。以下、それぞれについての先行研究をもう少し見ていく。

#### 4-2 「ではないか」に関する先行研究

「ではないか」は、話し言葉では「じゃない (か)」「じゃん」「やん (か)」などの形で現れる。聞き手を必要とせず、話し手自身が事態成立を認識する、次のような用法もある。

(20) あ、ここにあるじゃない。

対話における確認行為を論じた蓮沼 (1995) は、「だろう」「じゃないか」(本稿の「ではないか)」「よね」を対象とし、それらの確認用法を5つに分類している。「じゃないか」は、そのうち3つの用法に分類されている。

1つめは(21)(22)のような〈共通認識の喚起〉であり、「だろう」「よね」でも表される。「聞き手が忘れていたり、まだ気づいていないことについて、話し手が認識を喚起し、その成立状態を確認する」(p.393)という特徴をもつ。(21)のように共有する過去の経験の中の要素も、(22)のように想定された状況も含まれる。

(21) 同級生に加藤さんっていたじゃないか。背の高い男の子。 (蓮沼 (1995) p.393)

(22) 仮に30人来るとするじゃない。そしたら、一人5千円の会費で、15万円くらいの予算でいけるよ。 (同上)

2つめは、(23)のような〈認識形成の要請〉であり、「だろう」でも表される。「通常の認識能力を持っていれば、認識できて当然といった見込みに基づいて、聞き手に認識形成を要請する」(p.394)ものである。

(23) だから言ったじゃないの。あの人には気をつけなさいって。 (同 p.394)

以上2つの用法は、「確認要求」と呼ばれることの多い用法である。3つめとして、次の(24)のような〈認識生成のアピール〉が挙げられている。「だろう」「よね」では表されない、「話し手自身が知識を獲得したことを詠嘆的に表明する」(p.396)用法である。

(24) [開けてみたら中身が空なのを確認して]

なんだ、空っぽじゃないか。 (同 p.396)

これは、先に見た(20)のような独話の用法が、野田 (2014) のいう「疑似独話」として現れているものと考えられる。対話において、独話と同じ形で、話し手の認識などを表明するものであり、聞き手へのアピールが意図的であるか否かは判断が難しいと考えられる。

蓮沼 (1995) による3分類は、実際に話し言葉の例を見ると区別が難しい場合もあるが、5-3の考察においてはこの3分類を参考にする。

張 (2010) は、蓮沼 (1995) の〈共通認識の喚起〉にあたる「ではないか」と「だろう」について、自然談話における表現機能を考察し、「ではないか」の表現機能を次のようにまとめている。

聞き手への「認識喚起」を通して、話題や情報を提供する。聞き手への問いかけ性が弱い。下降調が多いが、上昇調に変えることによって、話し手は聞き手とインターアクションを取

りながら話を進めていくという姿勢を示す。(p.56)

これは、「だろう」のほうが「聞き手への問いかけ性が強い」という結論と対照的に示されたものである。

#### 4-3 「のではないか」に関する先行研究

「のではないか」は、話し言葉では「んじゃない(か)」の形で現れる。宮崎(2005)によると、「本質的には、話し手が発話時に行っている判断形成の過程を表示する形式」(p.29)であり、情報要求機能を担うか情報提供機能を担うかは、語用論的な条件によって決まるという。「のではないか」の基本的な機能をどう考えるかについては複数の立場があるが、本稿は宮崎(2005)の主張を妥当なものとして、考察を進める。

日本語記述文法研究会(編)(2003)では「のではないか」は「話し手の判断が未成立ながら一定の方向性をもっていることを表すというのが、その基本的な意味である」(p.179)とされている。対話での用法は、次の3つに分けられている。

1 つめは(25)のように、話し手の推量判断を伝える情報提供的な用法である。

(25) A「佐藤も来ると思う？」

B「ああ、たぶん来るんじゃないか」 (日本語記述文法研究会編(2003), p.180)

2 つめは(26)のように、「話し手の推量判断を示しつつ、同時に、聞き手はどう思うかということをはかっているニュアンス」(p.180)のものである。

(26) A「たぶん、明日は雨が降るんじゃないか？」

B「そうだね。この分じゃ、降るかもしれないねえ」 (同上)

3 つめは(27)のように「推量的な意味に積極的な問いかけ性が加わ」(p.180)った用法であるという。

(27) A「君は嘘をついているんじゃないか？」

B「いや、嘘なんてついてないよ」 (同上)

3つの用法の説明を見てもわかるようにこれらは連続的であり、話し言葉の実例において明確に区別することは困難である。したがって、5-4の考察では情報提供的な「のではないか」と情報要求的な「のではないか」に区別することはせず、考察をおこなう。

#### 4-4 「ではないか」「のではないか」の区別に関する注意点

「ではないか」と「のではないか」は、動詞や形容詞に接続する場合は、次の(28)のように形で区別することができる。

(28) a. {そこにある／高い} じゃない。 (「ではないか」)

b. {そこにある／高い} んじゃないか? (「のではないか」)

しかし、名詞や形容動詞語幹に接続する場合は、次の(29)に示すように「のではないか」の「の」が必須ではなくなるため、区別が難しくなる。

(29) a. これ、けっこう、{いい商品／貴重} じゃない。 (「ではないか」)

b. これ、けっこう、{いい商品／貴重} (なん) じゃない? (「のではないか」)

(29)の例で言うと、「けっこう、いい商品じゃない」という文は「ではないか」の可能性も「のではないか」の可能性もあるということである。したがって、音声データを確認することが

望ましいが、本調査で使ったコーパスでは不可能なため、それぞれのコーパスの元となった文字化資料で文脈を確認し、分類をおこなった。

## 5. 「ではないか」「のではないか」の使用傾向

### 5-1 考察の前提

3-2 で示した表 1 から「ではないか」「のではないか」の部分抜き出したものを、表 2 として再掲する。

表 2 2 コーパスにおける「ではないか」「のではないか」の出現状況

職場談話			名大会話		
分類	件数	割合	分類	件数	割合
「ではないか」類	333	8.5%	「ではないか」類	3456	12.5%
「のではないか」類	273	7.0%	「のではないか」類	1567	5.7%

それぞれの「ではないか」の形は表 3 のとおりであった。「じゃない」類には、「じゃねえ」なども含んでいる。

表 3 2 コーパスにおける「ではないか」の形

職場談話			名大会話		
分類	件数	割合	分類	件数	割合
「じゃん」	129	38.7%	「じゃん」	2259	65.4%
「じゃない」類	198	59.5%	「じゃない」類	849	24.6%
「やん」	6	1.8%	「やん」	342	9.9%
—	—	—	「ありません」	6	0.2%
計	333		計	3456	

名大会話コーパスでは特に「じゃん」が多いが、そのなかには次の (30) のように、標準語の「ではないか」とは使われ方が異なると思われるものがあつた。(30) では聞き手 X が知らないであろうと思われる事態に「じゃん」が使われている。

(30) F023 : あらワンちゃんだーとか言ってすれ違ったんだよ。普通に。それでその次のとき、向こうの方からは一っといってかけてくるじゃん。

F107 : すごい勢いで走って。私、あ、あーさっきの犬だとか私たちが言っとるじゃん。あんで向こうの人たちも、あっ、さっき会った子たちねみたいな感じで気がついたじゃん。犬も気がついたじゃん。じゃははって走ってきちゃって、犬が。

X : 〈笑い〉 そうなんだ。

(名大, data 001)

このような「じゃん」が特に多いようには思われなかったが、標準語と同じ使われ方の「じゃん」との区別が困難なため、以下の考察では、名大会話コーパスの「ではないか」については、「じゃん」2259 例を除く。また、「やん」342 例のなかにも「やんね」「～んやん」のような形で、



標準語とは使われ方が異なるものが74例あったため、それも除く。したがって、以下の考察対象とする名大会話コーパスの「ではないか」は、1123例となる。

まず、5-2で「ではないか」と「のではないか」の文の形を比較し、その後、5-3で「ではないか」、5-4で「のではないか」について、改めて使用傾向を考察する。

## 5-2 文の形の比較

2つのコーパスにおける「ではないか」「のではないか」の文の形を分類したものを表4と表5に示す。「ではないか」についてはほとんど同じ割合だが、「のではないか」では違いが見られる。以下、各分類について説明しながら、考察していく。「基本」というのは、「倒置・付加」「予告（アレ）」「引用」のいずれにも該当しない例である。

表4 「ではないか」の文の形

	職場談話		名大会話	
基本	256	76.9%	840	74.8%
倒置・付加	64	19.2%	235	20.9%
予告（アレ）	4	1.2%	6	0.5%
自思考引用	0	0.0%	1	0.1%
その他の引用	9	2.7%	41	3.7%
計	333		1123	

表5 「のではないか」の文の形

	職場談話		名大会話	
基本	158	57.9%	1154	73.6%
倒置・付加	34	12.5%	154	9.8%
予告（アレ）	11	4.0%	42	2.7%
自思考引用	48	17.6%	124	7.9%
その他の引用	22	8.1%	93	5.9%
計	273		1567	

「倒置・付加」とは、「ではないか」「のではないか」の後に、本来その前に現れるべき文の成分が続くもの、あるいは副詞的成分などが付加されたものである。倒置であるか付加であるかの区別は難しいため、合わせて、「倒置・付加」とする。「ではないか」では約20%、「のではないか」では10%前後現れている。

次の(31)は「お昼食べたら眠くなるじゃない」の倒置になっており、「お昼食べたら」は必要な情報である。(32)の「荷物を」、(33)の「きれーになったほうが」も必要な情報である。

(31) F132 : だって眠くなるじゃない、お昼食べたら。

あたし、だからそれが嫌いなね。(名大, data 036)

(32) M16E : いやいや、だからバスから降りてさー。みんな持ってるじゃん、荷物を一。

(職場, 打合わせ)

(33) F09A : でも、いーんじゃないすか、きれーになったほうが。(職場, 打合わせ)

(31)～(33)のような例では、話し手は「ではないか」によって、認識してほしいという思いを、あるいは「のではないか」によって自分の判断がその方向性をもっていることを、つい先に提示してしまい、不足している情報を後から付け加えているように思われる。「ではないか」は聞き手の認識を促す性質をもつため、必要な情報を後回しにしても先に提示されることが「のではないか」よりも多いのだと考えられる。倒置によって話し手の思いが強く伝わり、会話が躍動的なものになっている。郭・伝(2012)では、倒置構文の本体のほうの末尾において終助詞の割合が高いことが指摘されているが、それとも通じる結果である。

また、次の(34)(35)のように必ずしも重要ではない語句が付加される例もある。

(34) F048 : ねー、じゃがりこにお湯入れたことある？(えーっ)

F021 : なーいよー。

F048 : あれ、入れたらねー、あれになる。マッシュポテト。(えーっ)。

F127 : あっ、どっか、何かでテレビでやってたような気がする。

F048 : 何かね、弟に聞いてー、(やったんだ) やったらね、ほんとにマッシュポテトになったんだ。

F021 : 油浮きそうじゃない、何か。あ、でも、微妙に違うじゃん、なんか。

(名大, data 006)

(35) M12A : 非常に、い、セールスとして一番、大切なー、だれに対して情報を発信するんだと、そのだれって相手は、ただ会社として、全体で、把握できてないということ、だけじゃないのかな、たぶん。(職場、会議)

(34) (35) のように、情報として必ずしも重要ではない語句(「なんか」「たぶん」「別に」「もう」など)が付加される例では、「ではないか」や「のではないか」によって文が終えられるよりも、付加によってやわらげられているように見える。Maynard (1989) の指摘する、発話をやわらげる (less imposing) 後置だと考えられる。「ではないか」による認識の喚起や認識形成の要請は、文脈や言い方によってはかなり強い表現となる。それをやわらげようとする意識が働いている可能性がある。

「予告 (アレ)」とは、「あれじゃない」のような形で予告し、実質的な内容はその後に表示されるものである。出現数はいずれも多くはないが、「のではない」のほうがやや多い。次の (36) は「予告 (アレ)」の後に、倒置も現れている。

(36) F093 : そうそう何十万ぐらい、20 万ぐらいとか取ったんでしょう。

F123 : なんであんなにもうけがいいのに、盗む必要があるの。

F093 : なんかあれなんじゃない、ストレ、ストレスたまってんじゃないの、きっと。

(名大, data 049)

「予告 (アレ)」が「のではないか」のほうにやや多く現れるのは、話し手が自分の見込みを整理しながら話を進めることがあるためであろう。「ではないか」は既に話し手が認識していることを聞き手に認識させようとするものなので、「予告 (アレ)」の出現が「のではないか」に比べて少ないのだと考えられる。

主に「のではないか」に現れる「自思考引用」とは、話し手自身の思考内容を「のではないか」で表し、それに「～と思う」「という気がする」のように思考を表す動詞などを伴う、(37) (38) のようなものである。話し手個人の思考であることを明示することによって、主張をやわらげる効果がある。特に職場談話コーパスに多く現れている。これについては、5-4 で改めて考察する。

(37) F10D : べつーに、それーでいいんじゃないかなーとおもったんだけどなー。

(職場、会議)

(38) F141 : だってあたし、ごみ捨てるときすっごい気ー使うもん。セロハンテープとか絶対はがすもん。紙から。

F064 : あー、偉い。

F141 : なんか、いや、べつにその、そのぐらいいいんじゃないのって思うんだけどー。でも、そのぐらいいいことまで。(名大, data 123)

なお、表 5 では名大会話コーパスのほうが「基本」の割合が高いが、これは「自思考引用」な

どが少ないためだと考えられる。

「その他の引用」は自思考引用以外の引用であり、「～という」「みたいな」「とか」などによる広義の引用である。(39) のような例であり、「のではないか」のほうに多く現れている。

(39) M025: ない。だ、あれね元がね、どっか(東京) 違う、違う、名前違うんだけど、どっかの、何ちゅうの、フランチイズみたいな感じでやってるんじゃないかっていうのは、ネットで言ってたけども、よくわかんない。(名大, data 025)

このような引用は、話し手自身の見込みなどを表しているわけではないので、これ以上考察しない。

### 5-3 「ではないか」の考察

4-2 で、蓮沼(1995)が、対話における「ではないか」を〈共通認識の喚起〉〈認識形成の要請〉〈認識生成のアピール〉の3つに分けていることを示した。話し言葉の実例をこの3つに明確に分類することは困難だが、職場談話コーパスでは約13%、名大会話コーパス(1123 例中)では約40%が、〈共通認識の喚起〉とみなせる例であった。

〈共通認識の喚起〉は名大会話コーパスでは女性のほうが使用数に占める割合が高かったが、職場談話コーパスでは男性のほうが高かったため、本調査の結果からは性差とは考えにくい。職場談話コーパスでは、「朝」「会議・打ち合わせ」「休憩」という場面による違いはあまり見られなかったが、名大会話コーパスのほうが親しい間でのくだけた会話が多いことが両者の〈共通認識の喚起〉の数の違いに影響している可能性がある。雑談のなかで〈共通認識の喚起〉が繰り返された後に、話し手の言いたいことが示される例が見られる。次の(40)ではM029は「あの谷っていうのはすごいなって思って」と言う前に、「ではないか」による〈共通認識の喚起〉を2回おこなっている。

(40) M029: 参ったー。

あー、でもね、あの、(うん) オーストラリアとか、(ええ) それからコロラドの(ええ) 溪谷なんかは、(ええ) 山のとっぺんから(ええ) 降りるじゃないですか。

F098: ああ。

M029: 山登りじゃなくて、(ええ) 山下り【やまくだり】じゃないですか。

M017: はいはいはい。

F098: あー。

M029: あの谷っていうのはすごいなって思って。(名大, data 024)

次の(41)ではF013は「それもすごいしかられたの」と言う前に、「ではないか」による〈共通認識の喚起〉を3回おこなっている。

(41) F013: それと下敷き覚えてない?

M031: 下敷き覚えてる。

F013: 真ん中に継ぎ目があるの。〈笑い〉 下、下敷きなのにね。下敷きって平らじゃないといけないじゃない、ノートにこう。これがこんななって。〈笑い〉で、真ん中に継ぎ目があるじゃない。こうなってんのをこうやったら継ぎ目に負担が掛かってパキンと折れるじゃないですか。〈笑い〉 それもすごいしかられたの。(名大, data 037)

以上のように〈共通認識の喚起〉の「ではないか」は、雑談などにおいて共通認識を十分に喚起したうえで、話し手の言いたいことを伝えるために重要な働きを担っている。

「ではないか」の用法の分類が困難であるのと同様に、聞き手の反応も音声データなしで分類するのは困難である。おおまかに見ると、「ではないか」に対して、聞き手は肯定的な反応をすることが多い。〈共通認識の喚起〉の場合、聞き手は、知らないという反応をすることはあるが、内容を否定することは基本的にない。〈認識形成の要請〉の場合も肯定的な反応が多いが、聞き手が反論する場合もある。次の(42)では「ではないか」に対して「ではないか」で反論している。

(42) F032 : だって、ほかのところでさー、なんかで手術なんてのほかに人がいるからー (うん) あれだけど、歯はさ、1人でやってるから、(うん) 何か手が震えちゃって、そのときだけ震えたついたらもうアウトじゃない。

F007 : だれか周りにいるじゃない。〈笑い〉 (名大, data 010)

(42) は反論しているといっても、認識の違いを楽しんでいるような友好的な会話である。しかし、そう捉えられるのは F007 の会話のあとに〈笑い〉が表記されているからであり、聞き手に認識の形成を要請する「ではないか」は、文脈や言い方によっては、話し手の考えを聞き手に押しつける表現になりかねない。そのことが、5-2 で見たように、情報として必ずしも重要でない「なんか」などの「付加」が比較的多いことと関係していると考えられる。

#### 5-4 「のではないか」の考察

4-3 で見たように、「のではないか」は話し手の見込みを示すものであり、情報要求なのか情報提供なのかは曖昧である。したがって、(43) のように聞き手が情報要求と受け取って応答する場合もあれば、(44) のように情報提供として受け取る場合もある。

(43) F098 : せっかくこう待ってるんだから、もう 1 回ぐらい聞いてもいいんじゃない？

F075 : そうですね。 (名大, data 097)

(44) F088 : で、それで F152 さんの (うん) ものは、分、分析されないの？

F152 : するんじゃない。

F088 : ふうーん。 (名大, data 017)

5-2 で、主に「のではないか」に現れる「自思考引用」が、職場談話コーパスに多いことを見た。48 例中 36 例は、「会議・打ち合わせ」の場面の例であった。次の(45)では、会議の報告のなかで連続して「のではないか」が現れている。

(45) M09C : えーとですねー、1 番の行動点検なんですけどもー、あの一、えー、非常停止をしてー、えー機械を止めましてー、えーハンドルそうさー (操作) にしてー、えー、タップとですね、スピンドルの、あの、切り離しをやりましたけどもー、あの一ハンドルで、あの一やるときに一、あの一上昇してるか下降してるかの確認 ↑、をやってから上げていったほうが、やったほうがなお安全にできるんじゃないかと、そう感じました。あとですねー、えー、CK 点検の 2 番なんですけどもー、えーと、踏み台のね、あのベキシってゆう機械がいちばん奥にあるんですけども、踏み台の、うー、下の、カバーがですねー、変形していますんでー、歩くときに足をひっかける危険性ありますんで、そのへんの見直しを、あー、されたほうがいいんじゃないかと思います。あとーです

ねー、あの、ちょっときゅーきゅーばこ（救急箱）、ちょっと見ましたんですけどもー、あのチェックシートですか↑、なかったようなきい（気）が、したんですけどもー、これはチェックシートを、チェックされたほうが{そーですね、はい（09A）} よろしいんじゃないかと思います。あとですなー、4番のCKなんですけどもー、あの一、ヘルメットの貼ってあります名前等（とう）のですねー、シールがはがれてるのがけっこうありましたんでー、そのへんのみなし、見直しをね、されたほうがよい、よいんではないかと思います。

（職場、会議）

「のではないか」は、4-3 で見たように、「話し手の判断が未成立ながら一定の方向性をもっていることを表す」（日本語記述文法研究会（編）（2003）p.179）ものであり、特に強い主張を表す形式ではない。書き言葉では、論文で断言を避けるときなどにも使われる形式である。しかし、情報提供か情報要求かが曖昧であるため、話し言葉では話し手の見込みへの同意を促していると解釈される可能性がある。（45）で「んじゃないですか」と繰り返すと、聞き手は同意を強いられ続けているようで、威圧感を感じるであろう。（45）のように自思考引用の形にすることで、連続しても不自然ではない表現となる。

また、「のではないか」は、「んじゃないかな（あ）」「んじゃないの（かな）」「んじゃないかしら」のように、「か」以外の終助詞などを伴う例が多い。文の形ごとに、その数と割合を表6に示す。職場談話コーパスでは45%、名大会話コーパスでは約40%が「か」以外の終助詞などを伴っていることがわかる。

表6 「か」以外の終助詞などを伴う「のではないか」の出現数と割合

	職場談話		名大会話	
基本	77	48.7%	470	40.7%
倒置・付加	17	50.0%	59	38.3%
予告（アレ）	5	45.5%	12	28.6%
自思考引用	19	39.6%	53	42.7%
その他の引用	5	22.7%	20	21.5%
計	123	45.1%	614	39.2%

次の（46）では、「のではない（か）」の後に、「の（だ）」が接続し、「のではないの（か）」という形になっている。

（46）M05A：そりゃ、なにが1番一、わーわーわーわー騒いだからってゆうとねー↑、かね（金）つかんでなかったってゆうことが一、その一、きちっとーお金をつかんでなかったってゆうことがやっぱりあれじゃないのー、1番騒ぎ大きくしたんじゃないの。

（職場、休憩）

次の（47）では自思考引用の「のではないか」の「か」が「かな」になっている。

（47）F17A：えーっと、それから、あと3番目に、あの、養成講座の分類とゆうことなんですけども、これはあの一、やはり、養成講座、受講する方（かた）の目的ってのはさまざまだと思しますので、その目的にあわせてどうゆうものがあるかってゆうのを、あの一、全部分類して見せる、とゆうことがいいんじゃないか

な，と思います。

(職場，休憩)

前述したとおり，「のではないか」は話し言葉では話し手の見込みへの同意を促していると考え取られて強い印象を与える可能性がある。そのため，終助詞などによってそれをやわらげようとする傾向があるのだと考えられる。

## 6. おわりに

本稿では2つの会話コーパスを使って，まず，話し言葉における否定辞を含む表現の使用実態を明らかにした。基本的な否定以外では，「ではないか」類，「のではないか」類，評価のモダリティ形式のうち必要を表すもの，などが比較的多く現れることを見た。

「ではないか」「のではないか」は，否定疑問という形で話し手の心的態度を表すという点では間接的な表現と言える。これらが話し言葉に多く現れるということは，日本語で間接的な表現が好まれることの現れであろう。

「ではないか」「のではないか」についてさらに調査し，主に，以下のことを明らかにした。

- (1) 「ではないか」の約20%，「のではないか」の10%前後は，倒置・付加の形をとっている。  
「ではないか」は聞き手の認識を促す性質をもつため，その思いが先に提示されることが多いのだと考えられる。また，情報として必ずしも重要でない語句の付加は，やわらげようとする意識の現れである可能性がある。
- (2) 「ではないか」は，親しい間でのくだけた会話などにおいて，〈共通認識の喚起〉が繰り返された後に，話し手の言いたいことが示される例が見られる。
- (3) 「のではないか」には自思考引用が8～18%見られる。自思考引用が連続して使われ，聞き手に威圧感を与えずに，話し手の見込みを表している例もある。
- (4) 「のではないか」は，「か」以外の終助詞などを伴う例が40%以上見られる。これも，やわらげようとする意識と関係していると考えられる。

「ではないか」「のではないか」は間接的な表現であり，また，いずれも独話でも用いられる形式である。しかし，一方で，対話においては聞き手に強い印象を与える可能性もはらんでいる。「ではないか」は文脈と対立する認識を示し，「のではないか」は話し手の見込みへの同意を促していると受け取られる可能性があるためである。そのため，話し手は無意識のうちに倒置や自思考引用，終助詞の使用などによって，印象をやわらげようとしているのだと考えられる。

なお，本稿では音声データを確認できない資料を用いたが，今後は音声や映像のデータを確認できる資料を用い，より正確な調査，分析をおこなう必要がある。

## 付記

本研究は，科学研究費（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「話し言葉における使用実態調査に基づく日本語の否定表現の使用傾向の研究」（2018-2022年度，課題番号18K00630，研究代表者：野田春美）の成果の一部である。

## 注

- 1) 中納言 2.4.2 の短単位検索を利用。語彙素「ない／ず／無い」及び「じゃん」で検索し、誤解析や意味が不明なデータを除いたものを考察対象とした。
- 2) 表 1 は、野田（2020）の集計結果を修正したものである。野田（2020）で二重否定や「なければならぬ」などに複数含まれる否定辞がそれぞれ集計されていた点などを改めた。
- 3) 「日本語日常会話コーパス」のモニター版でも、ほぼ同じ傾向であった。

## 参考文献

- 安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 郭 潔・伝 康晴（2012）「話し言葉コーパスにおける倒置表現の形態論的特徴」（ブース発表）『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』 pp.235-240
- 現代日本語研究会（編）（2011）『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』ひつじ書房
- 高梨信乃（2010）『評価のモダリティ——現代日本語における記述的研究——』くろしお出版
- 張 恵芳（2010）「自然会話に見られる「ダロウ」と「デハナイカ」の表現機能の違い——用法上互換性を持つ「認識喚起」の場合——」『日本語教育』145, pp.49-59
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版
- 野田春美（2014）「疑似独話と読み手意識」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』 pp.57-74, ひつじ書房
- 野田春美（2020）「会話における否定表現の使用傾向」『社会言語科学会第 44 回研究大会発表論文集』 pp.62-65
- 蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為——「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法——」仁田義雄（編）『複文の研究（下）』 pp.389-419, くろしお出版
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏（編）『言語研究の技法——データの収集と分析——』 pp.43-72, ひつじ書房
- 宮崎和人（2002）「第 6 章 確認要求」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ』（新日本語文法選書 4） pp.203-227, くろしお出版
- 宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現——疑いと確認要求——』ひつじ書房
- Maynard, Senko Kumiya（1989）*Japanese conversation: self-contextualization through structure and interactional management*, Norwood, New Jersey, Ablex Publishing Corporation